



## 人面墨書土器 富山市豊田大塚遺跡

平安時代（9世紀頃） 口径13.2cm 高さ12.4cm

富山市教育委員会蔵

土師器の甕に墨で2面の人面が描かれています。ひなまつりの人形のように、人々の穢れを甕にうつし、溝や川に流して祓ったまじないの道具と考えられています。土器に描かれた顔は太い眉につりあがった目、濃いひげのずいぶん精悍な印象を受けます。これは現在のシルクロードを中心に活動していたペルシャ系の胡人をモデルにしているという見方もあります。

(特別展「越中と美濃を結ぶ考古展」で展示)

## 都市間交流事業 特別展

# 越中と美濃を結ぶ考古展

2009.10.30(金)～12.13(日)

飛騨地方が、県境を接する富山をはじめとする北陸地方と結びつきが深いのは良く知られています。しかし、直線距離で150 km離れた岐阜市と富山市も、実は何千、何万年も昔の旧石器時代や縄文時代からいろいろな場面で互いに影響を受けています。

下呂市の湯ヶ峰で産出される下呂石は、ガラスのように鋭い切れ口で思い通りに割ることができます。そのためおよそ2万年前の旧石器時代から弥生時代にかけて打製石器の材料として珍重され、岐阜県内だけでなく周辺の地域でも利用されました。富山県内では下呂石が、どの程度使われていたのかこれまでほとんど知られていませんでしたが、この展覧会をきっかけに調査がおこなわれ、今まで考えられてきた以上に富山県内でも石器の材料としてさかんに下呂石が使われていたことがわかりました。岐阜と富山の交流の始まりといえるでしょう。

下呂石とは逆に、富山から岐阜へ持ち込まれるものもあります。縄文時代、富山県北部の海岸沿いでとれるヒスイや蛇紋岩は、その美しい模様や色合いからアクセサリーや石斧の材料として各地に流通していました。岐阜県内でも規模の大きな集落遺跡からはヒスイの玉が出土し、蛇紋岩製の磨製石斧も多くの遺跡で見つかっています。

一方で、北アルプスをはさんだ岐阜と富山では共通点とともに様々な違いもあります。土器や石器、日本海に面した富山ならではの貝塚資料や古代寺院の瓦など、同じ時代でも岐阜とはまた違う文化の広がりを見ることができます。

この展覧会では今年度と来年度の2ヵ年にわたり、発掘資料をもとに考古学的な側面から、岐阜市を中心とする美濃と富山市を中心とする越中の経済や文化の交流の歴史を探ります。今年度は旧石器から奈良・平安時代までの資料を



富山市布尻遺跡出土 深鉢形土器 縄文時代中期  
(富山市教育委員会)

紹介します。

岐阜市と富山市は平成19年度に都市間連携協定を結びました。昨年度には東海北陸道が全線開通、JR高山線も復旧し、これまでもまして交流が盛んになりつつあります。原始・古代からの歴史や文化を見つめなおすことで、岐阜と富山の思いがけない共通点や新たな魅力を発見してみませんか。

### 関連行事

#### ◆講演会

##### ①「木製品に見る弥生・古墳時代の東海と北陸」

11月1日(日) 14:00～

講師：首都大学東京 都市教養学部教授  
山田昌久さん

##### ②「北陸と東海の古代まじないの世界」

11月8日(日) 14:00～

富山市教育委員会 堀沢祐一さん

・事前に電話でお申し込みください。

(定員200人)

#### ◆火起こし体験

11月22日(日) 10:00～12:00、

14:00～16:00

講師：当館学芸員 場所：博物館前

対象：小学生以上

申込不要 直接会場へお越しください。

・当日整理券を配付します

#### ◆展示説明会

11月15日、12月6日(日)

各11:00～、14:00～

講師：当館学芸員

## 企画展

# ちょっと昔の道具たち

2010.1.8(金)～3.7(日)

今年度で14回目を迎える展覧会。本展は小学生が社会科で初めて歴史を学習することをふまえ、「具体物を通して」学習する場を提供し、ハンズオンによる体験やジオラマ式の展示を取り入れ、「五感で楽しく」学ぶことを目的に開催しています。

展示コーナーは児童の生活に関連した「学校」「まちかど」「家のなか」「家のまわり(遊びのコーナー)」の4コーナーと、別に「100年くらい前の道具」コーナーを設けています。そのうち「学校」「家のなか」は、「おじいさん、おばあさんが子どものころ(90～60年くらい前)」、「まちかど」「家のまわり」は、「おとうさん、おかあさんが子どもころ(50～30年くらい前)」の時代設定とし、展示品及び各種体験用資料を陳列しています。また、会場内ではボランティアの「ものしり博士」が常駐し、解説や体験活動の補助をおこない、毎年ご好評をいただいております。

本展では毎年展示見直しをおこない、昨年度は「まちかど」コーナーにおいて、昭和40年代の居間をイメージした「まちかど住宅」を新設しました。縁側付四畳半一間に、ちゃぶ台・白黒テレビ・学習机・足踏みミシン・小学校教科書などを陳列し、ものしり博士による足踏みミシン実演や、野球盤、スマートボールなどの、ゲーム盤遊び体験を取り入れました。本年も引き続き当コーナーを設置する予定です。



「まちかど住宅」内部

また、土曜、日曜、祝祭日には、各種イベントを開催いたします。恒例となった「新春独楽まわし&南京玉すだれと腹話術」や「和みの唄会」をはじめ、今年度の新作も加えた「おもちゃ

作り教室」、ボランティアによる「ものしり博士のわくわくワークショップ」、メンコ・お手玉・ペーゴマの各大会など、ご家族で楽しめるイベントを用意しております。皆さんで「ちょっと昔」にタイムスリップしながら、楽しいひと時をお過ごしください。



100円程度の駄玩具を販売する売店「なんでもや商店」。学休日営業。

## 関連行事

### 〈一般来館者向け〉

- 新春独楽回し&南京玉すだれと腹話術  
1月11日(月祝) 11:00・13:00・15:00
- 「和みの唄会」—脳美の美講座入門編—<日本の歌百選 手習い処>  
1月11日(月祝) 10:00・14:00・16:00
- おもちゃづくり教室(各日11:00～、14:00～)  
「うぐいす笛」[200円] 1月10日(日)・親子でチャレンジ「布でつくる飾り梅」[1000円] 1月17日(日)・「からくり鬼」[400円] 1月31日(日)・「都どり」[500円] 2月7日(日)・「からくりぶんぶんごま」[300円] 2月14日(日)・「まゆびな」[400円] 2月21日(日)  
※[ ]内は材料費、定員各回先着20名(「布でつくる飾り梅」のみ各回10名)、開始30分前より整理券を配布します。
- ものしり博士のわくわくワークショップ(各日10:00～12:00、13:00～15:00) 1月16日・23日・30日、2月6日・20日・27日、3月6日の各土曜日
- みんなあつまれ!メンコ大会  
1月24日(日) 13:30～
- みんなあつまれ!お手玉大会  
2月28日(日) 13:30～
- みんなあつまれ!ペーゴマ大会  
3月7日(日) 13:30～

### 〈学校団体向け〉

- 学校利用説明会(小学校教諭対象)  
1月7日(木) 14:30～
- たぬきの糸車 SPECIAL DAYS  
2月25日(木)・26日(金)・3月4日(木)・5日(金)  
※都合により内容・時間等が変更になる場合があります。
- ※学校団体見学の申し込みは、随時受け付けております。ご希望の見学日時が満員となる場合もありますので、お早めに博物館までご相談ください。



新作の「布でつくる飾り梅」

## 加藤栄三・東一記念美術館

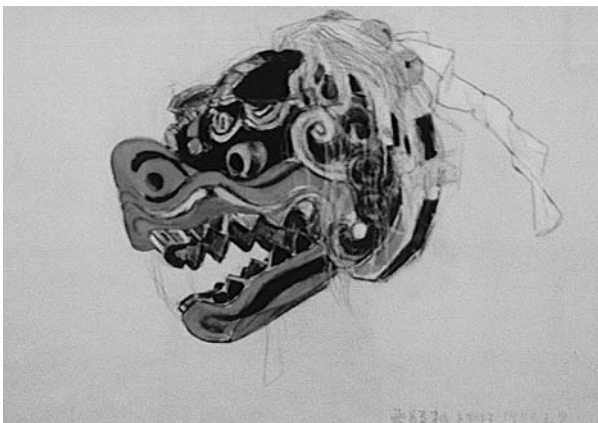
### 加藤栄三・東一 素描の魅力

2009. 10. 20(火)～12. 27(日)

「素描」という語を百科辞典でひくと「フランス語ではデッサン、英語ではドローイングという。木炭、鉛筆、ペン、コンテなどを用いて、主として線で描くこと、あるいは描いたものをいう。表現技術の訓練や彩画の下絵を目的とするが、独立した作品として描かれることも多い。」と書かれています。

素描は、絵を描く者にとって基礎となる大切なもので、師から事ある毎に「まずデッサン、デッサンをとおして本質を見つめなさい。」と聞かされ指導をうけます。

加藤栄三・東一は「素描の達人」といわれ、多くの美術関係者から高い評価を受けていました。1978年（S53）、東京銀座「和光」で開催された加藤栄三素描展の画集の中で、東京都庭園美術館長鈴木進氏は、次のように語っています。



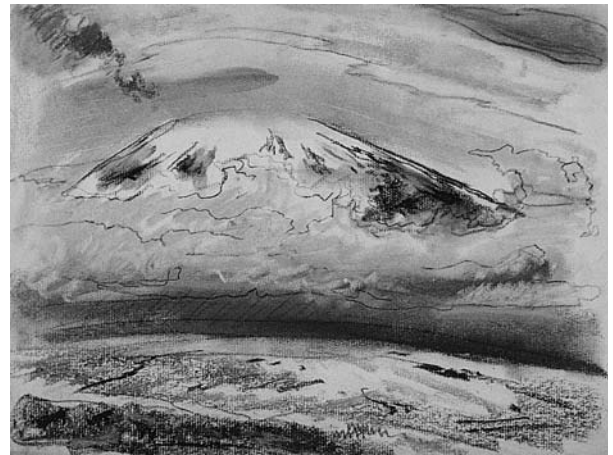
「獅子頭」 加藤栄三

「加藤栄三さんは、なんといっても、デッサンにかけては当代随一、その抜群の描写力には定評がある。たしかに、画壇にはデッサンの名手と称される作家は少なくないが、日本画家の独自の筆さばきによる筆の魔術は、その紙と筆との特殊な親和力に、やはり長年の修練と恵まれた資質とが不可欠である。加藤栄三さんには、

その才筆が、身に具わっていたように思われる」と、その才能を賞賛しています。

加藤東一は、素描について次のように語っています。

「矢立とか筆は、洋画の筆と違って含みがあり、筆勢とか、濃淡だとか、あるいは線に太い細いの抑揚があり、鉛筆など他の材料と違って私の感情がより出易いものです。パステルも筆と同じように、感情がストレートに出易く、スピーディに表現できるものです。」



「富士」 加藤東一

豊かな、しかも鋭敏な色彩への感受性に恵まれていた栄三・東一は、軽妙で洒脱な素描を鉛筆、墨、パステル、コンテなど多くの素材を使って描きました。

東一は、「鶺鴒とか祭りなど人の動きのあるもの場合には目で追っかけないで、動作などを頭の中に印象づけて描く。」と語っています。そのためにスピーディに表現できるパステルを多く用いています。特に描く色調に適した色画紙を使うことによって、よりスピーディに描いているのも興味が惹かれます。

栄三も素描について「対象環境により水彩、鉛筆、パステル、コンテなどを自由に使い繰り返し繰り返し描きます。そのうちに創作への意欲が次第に盛り上がってきます。私は懸命に写生に打ち込むことによって新しい自分の道を切り開いて行きたいと考えています。」と語っています。

本展で、栄三・東一の本画制作の根源となっている素描と対話することによって、素描がもつ醍醐味を味わっていただけるものと思います。

## 大学生のインターンシップ

歴史博物館では近年、中高生、大学生による職場体験のご要望が多くなっています。歴史や博物館の仕事に興味をもった学生が、将来の職業選択に生かそうと希望してきます。

8月には4週に渡って8名の大学生を受け入れました。学芸員資格を取得するための博物館実習とは別の、1週間コースのインターンシップ（職場体験）です。

1週間の活動では、学芸員とともに資料の調査・整理や講座の準備などをしたほか、展示室で来館者への解説や体験補助を行いました。また、歴博ボランティアから体験補助の仕方を教わるだけでなく、案内の合間には、昔の体験談や仕事論、人生観を熱心に聞いていました。



### <学生の感想から>

お客様と接する機会が多くて緊張しましたが、子どもさんが笑顔で帰っていくのを見ると、うれしくなりました。

博物館は一般の方に展示を見ていただくだけでなく、調査や資料提供の場でもあり、豊富な知識や研究が必要だと感じました。

ボランティアの方々も豊富な知識をもって来館者の方に対応しており、自分の未熟さに気づくとともに、もっと学びたいという気持ちをさらにもつようになりました。

地域の人との関わりの強さを感じました。職員だけでなく、ボランティアスタッフを含めた地域の人々と共にある博物館であると思いました。

1週間の実習の間に独楽の技をプロ並みに上達させ、来館した小学生達から賞賛の声を集めた学生もいました。短い期間でも、自分が熱心に取り組んだことが、喜びややり甲斐となって返ってきます。博物館の仕事だけでなく、働くことの意味や価値について考える機会になったようです。

### ■歴博セレクション（1階 特別展示室）■

「岐阜市の東山道」 2010年3月20日（土）～

東山道にゆかりがある、古代・中世の市内遺跡を紹介します。

### ■特集展示（2階 総合展示室内）■

2階の総合展示室の一角に特集展示コーナーを設置し、1～2ヵ月ごとにテーマを設けて資料を公開しています。10月から3月の日程は次のとおりです。

10月18日（日）まで	「絵画資料の修復」
10月23日（金）～11月29日（日）	「弥生・古墳時代の鋤と鋤」
12月4日（金）～1月11日（月祝）	「江戸時代の道中模様」
1月16日（土）～2月14日（日）	「朝鮮通信使」
2月19日（金）～3月22日（月振休）	「古地図」
3月26日（金）～	「縄文・弥生時代のくらし」

### ■柳津歴史民俗資料室の展示■

分室・柳津歴史民俗資料室（岐阜市柳津町下佐波西1-15 もえぎの里2階）では、10月から3月まで、次の日程で展示を行います。観覧は無料です。

10月4日（日）まで	「美濃派俳諧と柳津」
10月6日（火）～11月23日（月祝）	「柳津と養蚕」
11月25日（水）～12月23日（水祝）	「須恵器の世界」
12月25日（金）～2月14日（日）	「謹賀新年 博物館の虎大集合」
2月16日（火）～	「今日は楽しいひな祭り」

## 研究ノート

### 信長文書35号の花押

土山公仁

(1)

信長文書研究至高の到達点が、奥野高廣先生の『織田信長文書の研究』であることは、地球が太陽を周廻しているのと同レベルの自明さで、このエッセイのタイトルも敬意をはらって奥野先生がふられた番号を使っている。しかし、ぼくなりに信長文書を検討して、どうしても理解できなかったことが、「花押の形から」という年代観だった。もっとも、これは奥野先生の専売特許というわけではなく、相田二郎氏の研究（「織田氏并に豊臣氏の古文書」）をふまえているわけだから、おふたりの偉大さ故に、検討することなくそのまま踏襲され続けていることは、近年刊行された『愛知県史資料編織豊1』を見ても明らかだ。

(2)

ぼくが平成18年特別展『道三から信長へ』を担当した際、道三だけでなく信長の花押の時間的変遷（型式編年じゃ決してありません）も検討していたが、道三とちがって研究者が山のようにいる分野でモノ申すのは、はばかられ塩漬けにしておいた。

今年度に入って、岐阜市で信長に関する文献や信長の遺品、さらに信長に関する史料集を5年計画で調査・出版するプロジェクトが起動した。その中で、岡田正人さんや和田祐弘さんに、おおまかな見通しを述べる機会があり、研究ノートもまわってきたこともあり、以前考えていたことの再検討を開始したというわけだ。ちなみに、おふたりの名誉のために、この見通しすべてをお認めになっているわけでないことは、明示しておこう。

(3)

信長の花押について、相田二郎氏は17種、奥野高廣氏は14種類に分類した。今回とりあげたのは、相田氏のいう図版7から図版11、奥野氏



の7から9に相当する点と線で構成されたものだ。

この花押群については、あえて分類する必要はなく、ひとつづきの流れとして理解できる、というのがぼくの出発点だ。詳細な論証をする余裕はないが、大筋を紹介すると、Aの延長上にBが両側の線を上下に伸ばした菱形として登場したが、やがてAがふたつの線に分離し、BはAの延長線上に左端がくるのではなく、右側へより、方形模様にかわっていく。Cは当初Bの下に位置するが、これも長くなるにつれて当初一本の線で書いたものが、2つ、さらに3つの線と点になって、Bの直下から離れていく。AとCの関係も当初はAがかなり左に寄っているが、次第に左端が同じような位置関係になり、最終的にはCがAより左に突出するようになっていく。

このような一連の流れとして理解できるならば、比定年代を再考しなければならない史料が多数でてくる。

(4)

このエッセイでとりあげる35号文書(個人蔵)は、奥野氏が花押の形状から永禄6年に比定したもので、市橋氏を介して高木貞久が信長に応じたことを喜んだものだ。日付は4月24日。

この文書については、すでに吉田義治氏の論考がある。市橋氏の比定については異論がないが、吉田氏が永禄4年の可能性を示唆した際、根拠とした史料の年代や論証の方法に問題があると思う。(『白山史学』42)

さて、花押に話しをもどそう。永禄6年の信長文書を調べると、異筆ながら永禄六の年号をもつ6月17日毛利広盛宛書状(36号)、10月の曼陀羅寺宛制札(38号)などがある。ぼくにはそれらが35号の花押とまるで趣を異にするように思えてならないのである。

重複することになるが、35号文書とどのあたりが異なるかという、Aがふたつの線に分離し、Cも線と点に分割されていることだ。この特性は永禄5年2月の30号文書が初見だ。少なくとも永禄6年の時点で、オールドファッションド花押を信長がすえたとは考えにくいのである。それでは、この史料はどの年代にあてはめるのが妥当だろうか。

全体的なプロポーションを考えると、永禄3年9月の生駒氏宛書状(27号)にもっとも近い。この前後の時期という、永禄3年もしくは永禄4年の4月24日あたりを本命と考えた方がよいだろう。

27号文書の前は、永禄元年12月の雲興寺宛禁制26号になってしまい、永禄2~3年で直接、比較できる史料はない。永禄4年に関しては、永禄4年5月真福寺宛の制札(補112号の原本)、同6月神戸市場宛制札(29号)が残っている。それらと比較するポイントになりそうなのが、2点ある。Dの線の方向が35号文書だけ斜め右下がりになっている点、E・Fの点とBの位置関係だ。27号・補112号の原本・29号では、35と異なって、Eが方形のかなり左側の下にきている。

Dについては、信長署名との位置関係による特殊性ということで説明がつく。続く、E・F



▲図2 35号

の位置関係について、断定ははばかられるが、それ以前の花押の流れからいうと、もともと方形部分の下部ではなく右下にあり、Cが長大化し、左へ寄って

いくのと連動し徐々に左側へ寄っていくように思える。またAとBの左側の辺が直線上になるといった関係をふまえれば、35号文書は27号文書より古いスタイルだと考えてよいのではないだろうか。



1 38号(永禄6年10月)  
▲図3 2 29号(永禄4年6月)

(5)

花押の形状で、年代比定を行う危険性についてはぼくも充分認識している。しかし、詳細に分析すれば、さらに細かな書き癖の変化をも特定できると思っている。

前述したプロジェクトの調査で信長文書の高精細画像を収集中であり、花押の変化と信長文書の年代比定、さらにそれからどのような歴史叙述ができるか、については、他のプロジェクト参画者(谷口克広氏・松田之利氏・横山住雄氏・高木叙子氏・金子拓氏・竹本千鶴氏)とも充分な議論した上で、あらためて報告させていただくことにしたい。

# \*\*\*\*\* 館蔵資料紹介 \*\*\*\*\*

## 土岐頼世・成頼木像図

蓑虫山人筆 明治30年(1897)頃  
紙本著色 掛幅 縦32.0cm、横64.9cm

作者の蓑虫山人(1836~1900)は、安八郡安八町に生まれて若い頃から全国を放浪する生涯を送り、名勝地などの風景、祭りや民俗資料、考古遺物などをスケッチ風の絵に残しました。本名を土岐源吾といい、土岐氏の末裔であることを強く意識していて、晩年に美濃に戻った折には土岐氏ゆかりの寺を訪ねて境内図などを残しています。

本図は、画面向かって右の像に「捐館禅蔵寺殿正庵兼公大禅定門土岐公木像」と「揖斐郡宮地村大字願成寺 仏巖山禅蔵寺」、左の像に「弘誓寺開基土岐美濃守左京大夫源成頼公木像」と画題が付けられています。現在の揖斐郡池田町にある禅蔵寺は室町時代の5代目美濃守護である頼世(頼忠、?~1397)が創建、山県市椎倉にある弘誓寺は8代目守護成頼(1429~1497)が移築した寺院で、共に現在も創建者として各々の木像を安置しています。

前者の名称は禅蔵寺にある位牌を写して「土岐公木像」を付け加えたものであり、後者についても弘誓寺で歓談する自らの姿を描いた作品があることから、蓑虫が両寺を訪ねて木像を目にした事はまず間違いありません。しかし、木像が載る上畳の縁の柄、笏の持ち方や袍の色、袖の形など現存する像と異なる点が少なくありません。両者をほとんど同じ姿、顔かたちを描いていることから、実物を写生したというよりは、先祖を顕彰する気持ちから、わざと違いをなくして描いた作品、と考えたほうがよいのかもしれません。



\*\*\*\*\*

### 利用の御案内

- **開館時間** 午前9時~午後5時  
(入館は午後4時30分まで)
- **休館日** 毎週月曜日と祝日の翌日  
(月曜日が祝日の場合は翌日)  
※特別展開催中は変更することがありますのでご注意ください。  
※年末年始(12/28~1/4)

- **交通案内** JR岐阜駅・名鉄岐阜駅から岐阜バスにて長良方面行きに乗り、「岐阜公園・歴史博物館前」で下車、すぐ東に歴史博物館があります。  
公園内ロープウェイ乗り場すぐ隣に加藤栄三・東一記念美術館があります。

- **観覧料**  
歴史博物館常設展、加藤栄三・東一記念美術館  
高校生以上 300円(団体240円)  
小・中学生 150円(団体90円)  
両館共通で観覧される場合  
高校生以上 500円(団体400円)  
小・中学生 250円(団体150円)  
※市内の小中学生は無料、団体は20名以上  
企画展 常設展料金で御覧いただけます。  
特別展 そのつと定めた金額

博物館だより No.73 2009. 10  
編集・発行 岐阜市歴史博物館  
〒500-8003 岐阜市大宮町2-18-1 ☎058(265)0010  
(分館) 加藤栄三・東一記念美術館  
〒500-8003 岐阜市大宮町1-46 ☎058(264)6410